

＜今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 3章1～6節＞

1 推薦状を巡って考えるもよし。しかし結論は予想外のものに。

今の時代と同様、この時代にも重宝された推薦状。パウロはこの具体的なモノを持ち出して語り出します。パウロが問題にしている人々はお墨付きの推薦状を持ってコリントの教会にやって来た人たち、一方、パウロは自分の宣教で信仰者となったあなたたちこそが私の推薦状だと語ります。それで、どちらが本物の推薦状かを考える個所だなと思いがちですが、そうではないと思います。どういうことでしょうか？

2 「心に書かれる」「新しい契約」 — エレミヤ書31章31節以下

パウロはここで「心に書かれる」(2,3)、「新しい契約」(6)という表現を用いていますが、これは明らかに、旧約聖書と新約聖書の結びつきを示す大事な個所エレミヤ書31章31節以下を意識しながらパウロは語っているのです。すると、かつて神様がモーセに十戒を与えられた時に結ばれた契約とは違う「新しい契約」が「心に書かれる」仕方で与えられたことを語っていることが分かって来ます。すなわち、神様が御子イエス・キリストによって与えて下さった「新しい契約」です。

3 もう推薦状はいらない — 既に持つ推薦状、イエス・キリスト！

この新しい契約で注目すべきは、その契約を交わした人間の側には何ら誇れる理由は生じない、ただ神様に感謝することができるだけだということです。4～6節のパウロの謙虚な物言いと内容がそのような思いをよく表しています。古い契約も新しい契約も神様が与えて下さったという点で共通しており、人間が神と人への謙虚さを失えばどちらも意味がなくなるのです。すなわち、どちらの推薦状も危うさを持つのです。

4 主の体なる教会の肢体として生きられる喜びをしっかりとつかむ！

パウロは、信仰者とされたという「神様から与えられた資格」(5)に伴う二つの面をしっかりと捉えています。神様が与えて下さる確かさと、それに伴う謙虚さの二つです。この二つの確かさと謙虚さを知らされた者が共に生きていくように神様から与えられたのが教会です。その恵みと使命の大きさを思いたいと思います。(「今日の日々の御言葉」から)